

Japan

代表：小菅啓子

Email:keikosuge@hotmail.com

www.agapeworldjp.org (日本語)

Tel:045-262-9471 (自宅)

090-1266-3390 (携帯)



England

代表：恵子・ホームズ

Email:agape.kingdom@gmail.com

www.agapeworld.org (英語)

Tel: +44 (0) 20-8686-4263 (自宅)

+44 (0) 7968-057-059 (携帯)

いつも Agape World をご支援してくださる皆さま、
メリークリスマス！ そして喜びに溢れた新年をお迎えください。

今年は「心の癒しと和解の旅」を10月に行う事にして準備を進めてきました。しかし、参加者は4人しかいなかったもので、2015年に延ばそうかとも考えたのですが、93歳のウィリアムおじいちゃんが参加していたので、やはり今年中に実行することにしました。

9月の心の癒しと和解の旅報告

そのような時に、新潟県の青海市に工場がある電気化学工業株式会社が、元捕虜の家族のためにメモリアル（記念碑）を建立してくださり、その除幕式が9月5日に行われるとの知らせがありました。戦時には、英国人430人、米国人109人、ニュージーランド人1人がこの工場に収容され、過酷な労働に従事させられました。このうち英国人58人、米国人2名が死去しています。

以前、この地を訪れた元捕虜の娘さんご夫妻が、三重県熊野市紀和町にメモリアルがあることを知って、電気化学工業にメモリアルの建立をお願いしました。英国大使館もバックアップしてくれました。4年後に彼らの願いがかなえられ、電気化学工業が素晴らしいメモリアルを青梅工場の敷地に建立してくださり、除幕式が9月5日に行われました。この除幕式には、英国から7名の方が出席を希望していましたので、新たに9月にも「心の癒しと和解の旅」を実施しました。

除幕式には英国大使や外務省からも伊藤直樹氏などが出席し、またニュージーランドへ移民していった元捕虜たち数世帯の家族も参加し、日本アガペ代表の小菅啓子、京都アガペ代表の杉野マリ子も出席し、心温まる素晴らしい式典となりました。糸魚川に向かう途中で、私たちは非常に危険な目にあったのですが、イエス様にまもられて無事にたどりつけました。元捕虜家族の皆さんは、電気化学工業の寛大な姿勢に深く心を打たれ、感謝と喜びに満ちて糸魚川を後にすることができました。



電気化学工業での除幕式



雨空のもと、くっきりと見えた富士山

その後静かに瞑想できる場所に行きたいと言う元捕虜家族の希望で、皆で箱根に向かいました。箱根には小菅啓子、アガペワールド支援会の小堀洋志、豊代子夫妻が参加しました。

雨が降ったり止んだりの天気でしたが、奇跡的に1日中富士山がハッキリ見えていました。元捕虜家族をこのような形で慰めて下さった神様に感謝しました。

京都では杉野マリ子を中心に多くのメンバーの協力で素晴らしい思い出を沢山いただきました。その後は東京に滞在し、保土ヶ谷の英連邦軍人墓地での追悼式、そして外務省のご招待で美味しい日本料理をいただきました。アガペ関係者との豊かな交流もあり、一行は感謝の意を表して日本を後にしました。

皆さんをお見送りした後、小菅啓子と恵子ホームズはベトナム経由でタイへ飛びました。

タイでの行動についてはこの後にある小菅啓子の記録をお読みください。

また、メモリアル除幕式に関する3社の新聞記事が www.agapeworld.org の日本語版に出ていますので是非ご覧ください。なお、10月の「和解の旅」に関する新聞記事も多く、同じウェブサイトに出ていますので合わせてお読みください。



10月の「心の癒しと和解の旅」報告

一行5人が、10月2日に羽田に着きました。ロンドンのアガペメンバー、田口晴恵が皆さんをお連れしました。

小堀夫妻と恵子ホームズが羽田から参加し、直ぐ長崎に飛びました。

長崎ではグラバー邸、平和公園、原爆資料館などを訪問し、長崎の100万ドルの夜景を楽しみました。

次は京都へ。京都の名所旧跡を訪問し、回転寿しやホームステイを楽しみました。

京都オンヌリ教会では、ウィリアムおじいちゃんが証をしました。

Power Point を使って分かり易く彼の3年半の捕虜経験を淡々と語ってくれました。

「新幹線で京都に来るまでに幾つものトンネルを通りました。トンネルの中は暗いですが必ず明るい所

に出ます。私は 3 年半の捕虜と言うトンネルを経験しました。真っ暗なはずのトンネルに明かりがありました。それはこの世の光であられるイエス・キリストが私の心に生きていてくださったからです。私は生還でき、長生きし、こうしてみなさんにお会いできました。主に感謝します。皆さんもトンネルを経験することでしょうが、そんな時はイエス様を見上げてください。暗闇の中に光を投げかけてくださいます」そう言って彼は希望者に小さな懐中電気を渡しました。「イエス様を思い出してくださいますように」と。

紀和町のメモリアル報告

次は恵子・ホームズの故郷、三重県熊野市紀和町での報告をしましょう。

ここでは、まず中学校を訪問しました。全校生徒が 20 名程の小さな学校ですが、校舎は新しく、非常に立派なまるで外国の建物のような素晴らしい建物です。教室全てがそうなのですが、特に体育館は非常に設備が充実している広い部屋で、日本でもこのように恵まれた設備を持つ中学校は少ないのではないのでしょうか。

さて、三重県熊野市紀和町には、素晴らしいメモリアルがあります。かつて銅山で栄えたこの町の住民たち、15 歳で銅山で働かされていた勤労働員の人たち、そして石原鉦山が協力しあって、誰に頼まれるでもなく、戦後当地で亡くなった 16 人のために墓を建てました。最初は素朴なものでしたが、後に素晴らしい墓地になりました。



紀和町のメモリアルにて記念撮影

10 月 11 日にそこで追悼式がありました。今年はロンドンで交流の深い友人(英国国教会の牧師)郁子・ウィリアムズ師が日本におられ、非常に忙しい中を参列して下さり、南紀キリスト教会の寺田牧師と共に司式をしてくださいました。手作りですが心を込めた追悼式ができました。これには当地で捕虜だった方の娘さん家族、元捕虜の義理の息子さんなどが参列しました。また戦争当時子供であった、更家盛一郎さんが捕虜たちに親切にした思い出を語ってくれました。地域の人たちが協力の手を差し伸べてくれ、よい追悼式になりました。また、台風の接近で開催そのものが危ぶまれていた中で、イエス様はこの時を祝福して良い天気を私たちにお与えくださいました。

銅山資料館、瀨狭ジェット巡り、千枚田なども見てまわりました。それから、一行は東京へ向かい、英国大使館表敬訪問、保土ヶ谷での追悼式、慶応大学訪問、ショッピングなどを楽しみました。彼らは日本が大好きになりました。ウィリアムおじいちゃんは、どんどん元気になり、旅の後半は杖をスーツケースにしまい込み、元気で堂々と歩いたほどです。

10月の方たちが帰ってからは、いろいろな教会や大学で講演させていただきました。東京では慶応大学・三田キャンパスで2回。その後、直ぐ小菅啓子の車で京都に向かい、杉野マリ子の尽力によって、聖母女学院で生徒の保護者たちに対して講演させて頂きました。杉野マリ子、小菅啓子、そして私は理事長さんや学園長さんと素晴らしい交わりのひと時をもつことが出来ました。その後は、大阪の大久保みどり先生の教会でお話しをさせていただきました。

東京に帰ってからも本郷台キリスト教会、横浜ユニオン教会などに招いていただきました。今回は、祝福されるお金の使い方について、謙虚さと自信を身につけさせる子供の祝福のしかたなどを話させていただきました。

今回もいろんな形でご協力してくださった多くの方々に心から感謝いたします。皆さんの友愛のおかげで素晴らしい癒しと和解の旅とすることができました。ありがとうございました。

さて、私は今、息子の住むアテネにきています。太陽が出ているときは暖かいのですが、雲に隠れると寒くなります。こちらは例年より寒いようです。でもロンドンよりは暖かいでしょう。日曜日の午後4時頃息子の家の近くを散歩しました。地中海の紺碧の海に沿って広い散歩道が続いています。そこでは店を広げて土産物を売る人たちもいましたが、お客は殆どいないようでした。散歩する人はいるのですが、経済的なゆとりがないようです。

気温は12度でした。見ていると、3人の60-70代のご婦人たちが、ビキニ姿になり、紺碧の地中海に飛び込みました。彼女たちはスイスイと水平線に向かって泳いで行きました。夢かな、と、一瞬思ったのですが、地域の人によると、彼女たちは1年中泳いでいるのだそうです。

どの通りにもみかんの木が植えられていて、みかんがたわわに実っています。そのオレンジ色が海の青と白い家々に映え、素晴らしいハーモニーをつくり出しています。

アテネより愛を込めて 恵子・ホームズ

ここからは、日本代表の小菅啓子さんの報告です。

JUST IN THE RIGHT TIME (まさにこの時) バイロン夫妻支援の報告

2014年7月22日から8月13日にかけてWalesのAberystwythの小さな村Llanon (シャノンと発音)に住む84歳のバイロン(Byron)と74歳のイオナ(Iona)を訪問しました。”Just in the right time.”は私の滞在中にバイロンが何度も使った表現です。

昨年の11月にイオナの具合が悪くなってから家事全般が彼の肩にかかってきました。バイロンはバイロンで記憶力が衰え、昔のことは覚えていてもつい先ほどのことを忘れてしまうという状態ですので、思うように動けないイオナが彼のブレインになって二人三脚の生活が続いていました。妻思いの優しい

バイロンですが、この生活が半年以上続き限界を感じていた時にちょうど私が来たという具合でした。



左からヒュー、バイロン、イオナ、ガレス

到着した翌日の23日、息子たち二人が夫妻の家に来ました。長男のヒューと次男のガレスはそれぞれ家庭を持ち車で30分ほどのところに住んでいますが、あまり交流がないとのことで、この日ちらし寿司のランチを一緒に食べ夕方まで一緒に和やかに過ごせたことは、カタリストとしてあなたがいてくれたからだ、と言われました。詳しいことはわかりませんが、翌週にカナダに一家そろって移住する長男との別れの時にもなり、家族の大切な瞬間に一緒にいさせていただけました。

さらに数日たって思いがけない来客がありました。Jeff Brown というこの男性は1997年に恵子さんを初めてバイロンに紹介した人です。Jeffの来訪を受けてバイロンはその時のことを昨日のように思い出すと、その情景を語ってくれました。Jeffが日本人を連れてきたと、部屋に入ってきたが、ぎょっとして会いたくないと断ったのに、その入り口からはいつか来て、と指さしながら、今座っているこのソファのところに連れてきた、とのこと。バイロンの父親は長い間病の床についていて、父親代わりとなって家族を支えていた10歳年上の長男、リン(Lyn)が唯一の頼りでした。戦争が終わって兵隊たちが村に帰ってくると、リンはどうなっているのかといつも聞きに行っていたそうです。けれどもある日手紙が来て、終戦の数週間前にリンが射殺されたと知り、絶望と憎しみで心がいっぱいになったのですが、クリスチャンなのだから赦さなければいけないという葛藤もあり苦しんでいました。そんな彼とホームズ恵子さんの出会いを作ってくれた人にこのように出会わせていただけたのも奇跡だとわかりました。Jeffは近くに家を持っていますがすでに遠くに引っ越し、年に一度その家を世話するためにこの地域に来てその際にバイロン夫妻を訪問するとのことでした。もうその家は売りに出しているのだからここに来るのはこれが最後かもしれないというそんなタイミングでした。バイロン夫妻はこの出会いがきっかけとなって2002年に「心の癒しと和解の旅」に参加し、たくさんの日本人の友達ができました。

高齢のご夫妻との生活は心配事が尽きないというものの、一緒に祈り賛美し、み言葉を読むことができ、その日その日を感謝する日々でした。バイロンは立ってられないほどふらつく時が何回かありましたが、み言葉を読んで力が与えられたと言ひ、確かにそれ以来食欲も回復しよく食べられるようになりました。庭にはリンゴ、ラズベリー、トマトがあり、畑からはソラマメやラナビーンズ(いんげんを平たくして3、4倍ほどの長さになったような豆)やジャガイモが取れ、それらが毎日の食卓に乗ります。庭の向こうには羊の放牧地がありさらに向こうには大西洋が広がっており、日没時の夕陽は毎日の楽しみです。

賛美を口ずさみ、Lord is not good, but very good. (主は良いお方ではなく、非常に良いお方)を繰り返すバイロンの祈りに主が応えてくださっていることが、一緒に生活していく中で分かってきました。すぐ隣の青年Carwyn(カルウィン)が毎日のように彼らの様子伺いを兼ねて新聞を届けてくれます。素晴らしいクリスチャンの彼は訪問するとしばらく彼らとウェールズ語で話をし帰っていきます。ワーシップソングの3枚組のCDを貸してくれたので、賛美が部屋に流れました。また向こう隣の女性

Jackie も非常に靈的に深い洞察力のある方で、バイロン夫妻を内面から支えてくれている人です。彼女は夫妻とともに St. Michael という Church of Wales の教会に共に集っていますが、ここも聖霊様が歓迎されている教会で、何十年と牧師をしていた方が引退し最近では英国人の妻を持つナザレ出身のアラブ人牧師が来ておられます。8月3日の日曜礼拝の後に、体の不調を訴えるイオナのために数人の女性たちが熱い祈りをしてくれました。それからだんだん彼女の調子は良くなり、歩行のための補助器具を使わずに歩くことが増えました。

8月10日の日曜日からはホームズ恵子さんもウェールズに来てみ言葉の中からたくさんの励ましをしてくれました。ジャッキーもそう言っていたじゃない、とイオナが横から相槌を打ち、現実を超えた神の恵みの世界を受け入れることを周りから応援していることがわかりました。

人の助けを借りず自分たちだけでやっていくことに固執していたバイロンですが、私たちがウェールズを去る日、掃除や料理の助けをしてくれるところに電話をし、週に何日か来てもらうことになりました。これもジャッキーが前から勧めてくれていたことですが、ここに来てやっと実現しました。ジャッキーとは今もメールで連絡を取り合っていますが、外部からの助けを定期的に受け、二人とも今まで以上に元気になっていると教えてくれました。

ロンドンの恵子さんの家ではテレビを全く見ないのですが、ここではバイロンたちと一緒に見るがありました。その中でとても印象的だったのが、第一次世界大戦開始の100周年記念の礼拝の中継でした。ウェストminster 寺院で8月のある日、夜10時から午前1時までの礼拝の始まりの部分でしたが、「英国はこの戦争を終わらせるために参戦したがそういわず多大な犠牲を払うことになった。そのような人間的な愚かな知恵で行動したことを悔い改めましょう」と司式者が言って全員で1分間の黙祷がありました。とても印象的でした。日本の戦争関係の式典で「悔い改め」という言葉が使われたことがあるでしょうか。

8月13日ロンドンに戻り、アガペワールドの大切なスタッフたちとの交わりにも加えていただきました。堀之内菊三郎、多美子姉妹、Jacob John, 以前「心の癒しと和解の旅」で来日したことのあるラーコム夫妻と Dr. Paul Dakin、そして春恵さん。主が必要な働き人をこのように備えてくださっていることを心から感謝しました。そして主がこの働きをこれからも続けていくよう励ましてくださっていると感じました。



8月13日ロンドンに戻り、アガペワールドの大切なスタッフたちとの交わりにも加えていただきました。堀之内菊三郎、多美子姉妹、Jacob John, 以前「心の癒しと和解の旅」で来日したことのあるラーコム夫妻と Dr. Paul Dakin、そして春恵さん。主が必要な働き人をこのように備えてくださっていることを心から感謝しました。そして主がこの働きをこれからも続けていくよう励ましてくださっていると感じました。

とくに私のウェールズ行きのため祈り、支えてくださった皆様に心からお礼申し上げます。お一人お一人の上に何倍もの祝福が注がれますように！

2014年9月タイミッション報告

アガペ・ワールドを通じて知り合った元英国人捕虜の中には悪名高き「タイメン鉄道」に従事させられた方が多くいます。この鉄道の建設目的は、タイとビルマを繋いで軍の補給路を確保することでした。その現場を今まで訪れたことがありませんでしたが、今回機会が与えられました。その報告をさせていただきます。

タイ出発前日の9月21日の日曜礼拝は八千代福音キリスト教会で恵子さんがメッセージ奉仕をし、その夜は教会員の松原さん宅に泊まらせていただき、温かな交わりの中翌朝送り出していただきました。ベトナム航空を利用しましたので、ハノイ経由のバンコク行きでした。ハノイまで隣の席のベトナム人女性（新聞記者）といろいろ話しましたが、日本語を教えてくれる人が欲しいと言うことで人探しを依頼されました。彼女の隣に座っていた男性は大学教授とのこと。住居は無償提供、小遣い程度（2、3万円）の援助はあるので、貯金はできないけれど生活するには困らない、といった感じです。定年過ぎの年金暮らしの方大歓迎のようです。ただ、教職免許は必要です。もし、このようなことに関心のある方がおられましたら、ご紹介ください。

さて、バンコクには夕方到着し、翌23日の午前9時半、エリシャ先生がカンチャナブリから3時間かけて私たちを迎えに来てくれました。お母様が日本人でお父様がタイ人。奥様（由賀さん）は日本人で、日本に留学した経験もあり、生駒聖書神学校の卒業生でもあるので日本語を上手に話されます。私たちを乗せ、再び3時間かけてカンチャナブリに戻りましたが、途中先生たちが世話をしているミャンマー人の子どもたちの学校に立ち寄りしました。その地域はミャンマーからの出稼ぎの人たちが多くおり、昼間親が働いているときは子どもが放っておかれるのでその子どもたちのための学校を作ったとのこと。100人くらいの子どもの年齢別にグループになって、先生を中心に学んでいました。授業の終わりのや昼食の前には祈りが捧げられていました。教師たちはほとんどボランティア、紹介された一人の若い女性は8年前からこの建物の中にすんで献身的に子どもたちの働きをしているとのこと。世界の片隅で忠実に主の働きにいそしんでいる聖徒たちの居ることに感謝し、皆で祝福を祈りました。

ホテルに行く前、戦没者共同墓地の近くにある戦争博物館によりました。館長さんでもあり恵子さんの友人でもあるRod Beattieさんは残念ながら不在でしたが、中を見学しました。

夕方にはエリシャ先生のお母様の君枝先生、森和亮牧師とそっくりのお父上、3人のかわいい息子たちのすてきな母親である由賀先生にお目にかかりました。（この先生方のことは、私が2月にリバイバルミッションでタイに行ったときに知り合った小長光先生から教えていただきました。）君枝先生は50年前にラオスで宣教を始め、数年後ラオスが共産化したためタイに移り、以来ずっとカンチャナブリでご主人、息子さんとともに教会を建て導いてこられました。エリシャ先生がその教会にもつれていってくれましたが、町の中心近くの交通の便もよいところに大きな教会堂が立っていました。建物に隣接して屋根付き屋外集会所のような広いところもあり、これからの教会の成長にあわせて主が場所を用意してくださったとのこと。土地の持ち主が喜んで売ってくれたそうです。教会ができる前はその一帯はスラムで、麻薬売買が横行していましたが、教会ができてからは環境もよくなり、すぐ近くにバスターミナルもできて、交通の便も良くなったとのこと。地域のトランスフォーメーションがここでも起こっているということです。いただいたニュースレターには、昨年だけで19名の受洗者があり、その中には病や麻薬から奇跡的に解放された方々がいるとのこと。ハレルヤ～！



24日、君枝先生、エリシャ先生ご夫妻と2歳の末息子の大志君とともに足もとから川の流が見えるタイムン鉄道の線路の上を歩きました。「スピード」と怒鳴られながら工事を進めていく中、足を滑らせ落ちた同僚を助けることも許されず泣きながら働く人々の姿が脳裏に浮かびました。タイムン鉄道では6万人を越え連合軍捕虜と27万人の労務者と呼ばれるアジア人労働者が使役されました。連合軍の死者は12,399人と詳しい数字が残っ

ていますが、労務者たちの記録は残っておらず、死者は7万とも9万ともいわれています。この後に行ったヘルファイアパスの記念館でもらった資料によると「労務者にとって状況は捕虜たちより過酷で、彼らに対して基本的な医療手当を行う軍医はいませんでした」と記されています。ここで皆で手をつないで日本の罪の悔い改め、日本のために流してくださった主イエス様の血潮に感謝し、この地の癒しのために祈りました。

アガペ・ワールドの支援会の責任者である小堀さんは、ミャンマーへの宣教師、Mさんの支援もされています。ちょうどM先生がバンコクにおられたので、お目にかかることができました。

日曜礼拝はバンコクの中心街にある「バンコク日本語教会」に出席し、午後は1時間ホームズ恵子さんの証しの時間をいただき、20名ほどの教会員のかたが残って参加しました。ほとんどの方は駐在員のようで、数年で移動するようですが、日本語で礼拝できる場所として50年続いており、来週は50周年記念の催しがあるとのことでした。

短い滞在でしたが、多くの主にある兄弟姉妹と新たに出会わせていただき、主のお働きに深さと広さを実感しその中に加えていただける恵みのゆえに主に深く感謝した日々でした。

支援会からの報告

今、街では、クリスマスソングが流れ、大通りや駅前などでは、LEDイルミネーションが輝いています。自宅をカラフルに飾っている家も見かけます。

そんな街を、コートの手を立って寒そうに家路を急ぐ方も多く見受けられます。全ての人にイエス様の温かい愛が届きますように。

アガペワールドの活動を支えて下さっている皆様、良いシーズンをお過ごしください。そして、来年が皆様にとっても素晴らしい年であるように願っています。

今回は、恵子ホームズさんと小菅啓子さんからの多くの報告をいたしました。是非、じっくりとお読みくだされば幸いです。この1年、皆様からのご支援をこころから感謝して。

支援会代表 小堀 洋志

アガペワールド支援会

195-0061 東京都町田市鶴川1-17-9 小堀方

Tel/Fax : 042-810-5481 メール : kobori531@jcom.home.ne.jp